佐渡名所圖會 一

ロ 1—9
1094

門 ロ二9
1084
1-5

教訓書

勿以善小而不為
勿以悪小而為之

富貴

[library seal]

凡例

一 世渡名所圖會と表題あるものハ全部十巻あるを。今爰に發行する所の五巻ハ児輩の耳目に納得しやすきもの而已を抄出せしものなり。後編五巻ハ詞粗よりくハしく雖。論辯大〳〵しき故に父母に開雕仕申べくさし除なり

一 大事ハ一大寺にあらず堪忍五両を御心みなし。戯ぐれにて筆は下さべ。世に云洒落

一

本めきたるとども清善に引入るの方便なれバ。彼耳味はよふつく矣をすむと大抵日々の論なるふるは志かでし

巻中載所の物は續。腮の建思案の備。鼻の障子。何ふるハ山川地理の名なるもあり然ど。是ハ支體の中ふ名跡なるといふふるく。皆乃沙汰なりたるや見む人をろ雅是を思人。

世渡名所圖會巻之一

目録

初登山　智恵の海
年弘関　寶乃山
大山　鼻弘崎
鼻高山　高慢口
口早浦
智恵弘淺瀬
借銭の山
一大寺
貧の門

一条通新町西入
書林水谷傳兵衛

○初登山　寺子家又寺屋といふ

男女共小児八才の時。此山へ登りて手ならひ学文をはじむべしと。古よりの教なり。すべて手習師匠なんどいふは昔。今時のやうに所々にあることなかりしゆへ。多くは山寺などへ登りてまなびけるところなれば。其のちまで手習に行くを。師匠の家へ行をば登山といひ。又師の家をさして。寺とも寺屋ともよびならはしけるとしるべし。

初登山手習教訓書

寄宿寮
二天神
初学門

右大林忘不矣合戦之出立其故如何初心之児童登山之時者如為武士之戦場師匠者大将軍也硯墨紙筆者如武具之類也卓机者如城擲筆者打物如太刀長刀也

以下畧

世に此作者をしるものなし。是ハ岡本半助先生の作なるよしある老人の語られき。

京わらんべ子どもはいとけなき時より人形の絵など書ならひてよめるなれど。

打物乃筆をとるくせなりしは

かどのよの家首尾よく出来たるひろ

北野山の霊ハ

天満大自在天神宮也　祭日毎月廿五日

二月初午登山の吉日とさだむ。其いはれは志らん。幼稚の子供ら筆墨紙ものはじめ

ぞし。不精なるものハ机のうへのほこり一寸

の香をしらず。ほどまで。きよめさするそのおもの

おもしろきなり

詩曰

我勸世人訓子孫　子孫成敗關家門
良玉不琢不成器　苦是驕養是病根
寢坐視聽胎有教　箕裘弓治武常繩
黄金萬両有時盡　詩書一巻可常存
養子不教父之過　愛而勿勞豈是恩
世間不肖因姑息　我勸世人訓子孫

○ 智恵の海

智恵の海は人間第一の勝地なり。まいか
うるふして智恵深き人であるとおもはれど毎
まなこにかくれてうかばれ海なり。唐の孔明日
本の楠正成なんどの胸の中にこそ智恵の
海はありしなり。

○ 智恵の浅瀬

是はおろかなる人の胸の中にある海なり。平
生の分別かれど浅瀬の名によばれたる人なり。

○

浮き名を塩冶殿とて
これも智恵の浅瀬をいひしものにて。あされ
たゞ人の海といはんとて渡されたるの塩冶殿とかいふ。

仮名手本忠臣蔵

○年（とし）の関（せき）　年の坂年の市なども皆同じ文字にて稍（やゝ）同意なり。扨（さて）此年の関といふハ、人の月日を越る関なり。

年の関といふハ、行く人の関所にて、一年の月日の関（せき）なり。
登（のぼ）りつめたる峰と春のたちかへる関（せき）なり。
世渡（よわたり）のくるしき貴賎（きせん）ともに越（こゆ）る所なれば、関（せき）守
なけれども金銀（きんぐ）の手形（てがた）にあらざれば通（とほ）るもの少なり
ける甚（はなはだ）むつかしき関所（せきしよ）なり。
古語（こご）に曰一年の計（けい）ハ元日（ぐわんじつ）にありと。世（よ）の
人能（ひとよ）く此義（ことはり）をまもりて元日より家業（かげふ）
を情（せい）出し費（つひえ）をいとふて始末（しまつ）を心がけ

給（たま）はゞ此関（このせき）をバ越（こゆ）るもやすく過（すぐ）べきなり。

極楽（ごくらく）へつゞく月日（つきひ）に関所（せきしよ）すれ
越（こゆ）ることもなりがたき人　大江丸

元三（げんざう）の棒（ぼう）がまちに在（あ）るなり
ふつゝかなる年（とし）の関（せき）かな　井蛙亭如水

○
余念（よねん）なく算用（さんよう）も勘定（かんぢやう）も済（すみ）て
ころく越（こす）なる年の関哉　四方赤良

されて年始（ねんし）もうけてまことに人（ひと）かどりも
用（もち）ゐて楽（らく）しく年（とし）の関（せき）を越（こ）えられしよろこびを見え…

寶珠山

○寳の山 江戸春狂言曽我五郎時宗のせりふよ
寳の山よりかゝずしてとふて借銭の剛ハ此山よりぞ流の末なり

○借銭の山

世帯のたからハ川の流や
うき瀬乃山よ借銭の山 飯盛

○大山 此山の人をさして山師山手かせぎといふ
慾ふかくおそひきくいふ
あらゆる人のいきおふ山なりば此山の人おぼし
甚くなくまづしく見る目はなれど。貧よ大なるものは
ものをもて見えとられざれど。あつかくときは氣をと
もるる人心嵐の強くして心やすらかなれおやまちは
此海。まつく儀のきたくそて海をうらくしそひなりし。
富貴の家々とゝまりあらんことを悦ぶ。まことも中々
なりぬ山なり。

榮枯得失命ノ安排
士農工商莫徒
妄想心高百無成
厭常喜新没終始

貪著天上月笑却手中珠 といふ佛經の文と思ひて
うつくまつやくやうをのみ 宇冲

○鼻の崎

此地の風人と面對する時。鼻の高きをてあいさつする事なれば鼻と名づくといひ。又家の高き男業もなく。鼻の先の智恵ばかりにて世を渡る人。鼻の崎とよぶともいへり。いづれにてもさばき風俗なり。田舎より人はたくさんなく都會の地と別て。うはたびの人多く見るなりけるべし。

茸狩や鼻の先なる謡かな　其角

○一大寺

一大事とも書なり。宇宙の一大事。身体の一大事。衣服の一大事。家業の一大事と五流にわたる。宗旨の大事は信心なり。一大寺は信する人間の生根の土台なり。人をまもれきるなれば。抑もいはいふ字といひならはす。生死一大事の因縁と猫をもつき違ひて。人みな世界に背きそのみなしその たちまち人気をうまれし人になれば士のまち。然ば茶をのめ百姓の道にてあ。職人と職人の家作は先に商人のそれ代勤て

主人に忠ありし。父母に孝を盡し。兄弟むつ
まじく親類をしたしみ。朋友にまじはるに信をもつて
せねば。人間に生れきたるしるしなし。是ぞ人たる
一大事といふなり。又生死の一大事といふことあらく
今こそ世を治る志の時なれば。此世の国をもえんだ。然すれば
しみせぬ生のよくて然らくるの世の中ほまれし。
是然らば下も心にかなはぬ身なれば。務りて
のこる病ぬくて然んで先へどのやうに西へと云ふのも
つみ一つあれば世をうらむ人の気ゆゑの人も

なりきたらしと生きて居るはずなしとそのくて孝
目のみ只何角に付けて。此世の名利をさらしい
をたまり。もう入れ吉かく右のうちのあらに時もつき時
に行の仏かあいさし。是ぞ田舎の子供の京大坂
江戸などへ丁稚奉公に出て見なば國にあり
まするにはおにでも折々にいやりと父母兄弟もな
きつくしからうして出て行き其子が先の地
にみなうれば。又田舎なりに奉利にもおもしろく思ひ
志でもくるもなくて只ならずや何事も自由もかなれもう

奉納
御寶前

鼻高
通

なればおのが國のすいをちらすなく。十年十五
年と月日も立ちて。又國へ帰るがいやになり。その
地のなじみが。ちとしまれおじめおゝ出付く
がれじやうになりし思ふそのなり人の恥を
いやがれも。ちら紙まよがるあれしいつて身を
おもれおりひのかよんぬふりも志ればなり。

湖東氏

いかなりてある山まやちかるそで出るが今に
なれるの風もいや
はうるよそその場所といひなへつくき申るなり

○鼻高山

此山の人備りみ達まれ。手がらが度しれ
ちとあれバ。鼻のさきをうごめかして自慢の高
顔色をあらわし世を見くだしてうぬぼれ
鼻高山といふ。

○高慢口

学まづたるを観付けて
岩もそこ技とまるて行ちじ
高慢口は鼻高山の出口にして。なまなま人を

らんぜうをはうちならしは都ちらし
ありけれ。ゑ慢心らうふらぎして自慢
すなはち。獨りさが閙ふくりして人なりてこは
きらしてまがりみちのあきはりして。自慢いひ
なくりぬるのみぞ。
あるかなるちゑはかくしてる稜山叩
説よるの如くえくぬ娃ぬ　平砂

○

禍乃門
家根とういふん
舌は禍の根となり皇も禍の

くちはしなして禍の門といへ。誰しも知り
きまれることながら。實よりも出たるのく。
しるく守りて。五尺の身はおやまうりりつの
ます。ことつれて八一郡一國のうぞうひをうなれ
はなり。聖人の多の難はとてゆつもうきの
あらしはれでて康車塚の精のむくはぬなん
ても。みるまんまて世の人ではたる皇室
ねるものもなるれをずるぞんとはるまくべし。
凡人の爲ちくちぬるのて身をもちてけつして

いつ浦しごはこえけり。

網の綱おろしてはやせるは
おもりぬるは塩干ぞなき　よみ人しらず

○口早の浦

口早の浦は人のあふ波風とて。あなやう
あつばいよわりつけ。おしまよつまく。世の
さが人の人ぞぐ。とひあるくが。此浦の
風をあたり。口早て口よりとあり
きまのぞ人なきまりれきまづけられて

はみつきく。舟の跡もとぬ。船をるべく走ら
去つむだし。人の何つもとく舟ぶすべきよそて
目出度なく申しされ。

去らずくらくいな行事　也有

世渡名所圖會巻之一終